

近代日本のキリスト教保育における先駆的福祉活動に関する研究：プロテスタント系及びカトリック系の実態を中心に

関東学院大学キリスト教と文化研究所
熊田凡子・菅原陽子・小林恵子

1. 本研究の課題とキリスト教保育を哲学する研究会

1月例会では、報告者たちが営む関東学院大学キリスト教と文化研究所「キリスト教保育を哲学する研究会」の2024年度研究活動の一部を発表させていただいた。

この「キリスト教保育を哲学する研究会」は、「キリスト教保育とは、どのような意義があり、どのような思想が通底しているのだろうか」といった問いに基づき、キリスト教保育の歴史・思想に関する人間学的教育学研究を行うこととし、月に一度、キリスト教保育・教育に関する専門書の文献講読の勉強会や専門家の講座等を開催している。2024度は、近代日本の主に明治期のキリスト教保育において、いかなる児童福祉活動（保育所や孤児院など）を行っていたのか、その源流

を明らかにするとともに、プロテスタント教会（主にアメリカ）やカトリック修道院（フランスなど）から日本に派遣された女性（女性宣教師や修道女）たちや日本人福祉事業家らが携わった保育所や孤児院等での福祉活動の実態を把握することをテーマとした。

なぜなら、これまでキリスト教保育の通史的検討が、プロテスタントの幼児教育の歴史を中心にされてきたため、プロテスタントとカトリックいずれも含むキリスト教保育の福祉活動の歴史的意義が言及されてこなかったからである。

そこで、本研究では、キリスト教保育におけるプロテスタントとカトリックの先駆的な児童福祉活動（保育所や孤児院など）の目的や特徴及び当時の日本の社会背景を明らかにすることを課題とした。

なお、本報告は、主に『キリスト教と文化』第22号（関東学院キリスト教と文化研究所、2024年3月）の内容に基づいている。以下、発表の内容をまとめたものである。

2. 近代日本におけるカトリック系の児童福祉事業の導入と先駆的福祉活動の実態

目次 兼 研究発表リスト（その49）

2024年1月20日

近代日本のキリスト教保育における先駆的福祉活動に関する研究

—プロテスタント系及びカトリック系の実態を中心に—

熊田凡子、菅原陽子、小林恵子 共同発表 …… 1

2024年2月17日

帝室博物館の原田次郎 —美術に託した異文化相互理解—

小前ひろみ …… 4

2024年3月16日

最初のオルガンを考えて

赤井 励 …… 6

2024年4月20日

関東大震災における内村鑑三と賀川豊彦

黒川知文 …… 7

井本儀明さんを偲ぶ

岡部一興 …… 12

編集後記

花島光男 …… 12

2-1. カトリック宣教開始と再宣教

日本に最初にキリスト教を伝えたザビエルらの来日16世紀（1549年）に遡る。

この時代の農村では貧しさのために多くの婦人たちが墮胎し、女兒を殺す間引きの習慣があった。そうした状況に心を痛めた神父、ポルトガル人医師のアルメイダは、来日後イエズス会に入会し、初等学校、病院、育児院（1555年：豊後で、キリスト教徒の乳母を雇い、2頭の乳牛を飼育し人口栄養を導入して赤ん坊を養育）を設立している。

その後、コスメ・デ・トーレス司祭らによる「慈悲の組」（1559年：アルメイダによる大分の病院で病人の世話にあたる信者の組織）という孤児の養育活動（長崎、山口、京都など各地で、戦国下のため医療、救護、救貧などの保護事業と親を亡くした孤児や捨て子の養育）が展開されていた。

ところが、1612年江戸幕府のキリシタン禁令により活動は止められることとなる。

その後幕末維新期の再宣教となり、1844年にパリ外国宣教会（MEP）のデオドール・A・フォルカードが先立って那覇に上陸後（布教に至らなかったが）、1858年日仏修好通商条約により開港場におけるフランス人信教の自由が認められ、翌1859年プリュダンス・S・B・ジラルールが来日、その後、横浜、長崎、神戸、函館へと宣教が展開した。1865年には長崎大浦天主堂での潜伏キリシタンの信仰告白が起こる。さらに明治政府がキリスト教の信仰を黙認した1873年前後から、ベルナル・T・プティジャン司教が、将来の教育や社会事業の担い手として修道士と修道女の来日を画するようになった。このような日本開国前後のMEPの活動が潜伏キリシタンの信仰の回復や継続を促すとともに、修道士や修道女らの教育・福祉活動を推進させていったのである。

2-2. 女子修道会の児童福祉活動の開始と実態

日本に初めて来日した女子修道会は、サン・モール修道会（現・幼きイエス会、雙葉学園：1662年フランス創立）である。1872（明治5）年、メール・マティルド、フェルディナン、ノルベル、グレゴワール、ジェラーズら5名の修道女が、長崎のベルナル・タデ・プティジャン司教の要請を受け6月28日横浜から初来日する。日本政府がキリシタン禁制の高札を撤去する前年のことである。

マティルドは、1854年から約20年間シンガポールで活動し、そこで日本での活動を願った上来日した。横浜に上陸後はまず、山手居留地58番に住居し、修道院と孤児院仁慈堂、外国人子女教育の学校ダーム・ド・サンモールを開始する。孤児院仁慈堂は、当時は、「尼寺の孤児院」と呼ばれ親しまれ、3年間に乳幼児80人、児童数350人、里子250人が暮らした。1880年和仏学校と称し、2年後には私立専門学校令によって「董女学校」となり、関東大震災（1923年）で壊滅するまで社会事業施設として存続した。

翌1873（明治6）年の2月24日、日本政府はキリシタン禁制の高札を撤去した。そのころ、日本におけるカトリック教会は南北の二教区に分けられ、パリ・ミッション会の宣教師が担当していた。すでに、来日していた同会のプティジャン司教（南日本代牧区：大阪）、オズーフ司教（北日本代牧区：東京）は、この好機を生かして本格的な布教活動に挺身し、女子修道会（主にフランス）へ派遣要請を出していった。これを契機に女子修道会が次々と来日し、教育・医療・福祉等の活動を展開させていったのである。

サン・モール修道会（幼きイエス会）に次いで1877年に来日したのは、ショファイユの幼きイエズス会（フランス・ショファイユ1859年創立）の4人のフランス人修道女で、マリー・ジュスティヌ、センチリー、セン・フランソワ・ド・ボルジア、マリー・ベルナルディヌである。同じく、ベルナル・タデ・プティジャン司教の要請に応えての来日であった。

次いで来日したのは1878年、シャルトル聖パウロ修道女会（フランス、1696年創立、白百合学園）である。北部担当のピエール・マリー・オズーフ司教が、シャルトル聖パウロ修道女会に修道女の派遣を依頼し、その年、3人のフランス人修道女、スール・マリ・オウグスト、スール・マリ・オネジム、スール・カロリーヌが函館に到着した。3人の修道女たちは日本家屋に住み、その土地の生活に慣れる努力をしつつ、病人を訪問し、苦しむ人を慰め、親のいない子どもたちのための施設を造り、診療所「博愛医院」を開設した。また、生活の糧を得るために手仕事を行い、地域の孤児の面倒をみていたことが記録に残されている。

かつてフランシスコ・ザビエルが鹿児島で教え

の種をまいたと言われるキリシタン信仰の継承は約340年の時を経て実を結んだのである。(詳しくは、当日配布資料「表1」を参照していただきたい。)

3. プロテスタント系のキリスト教保育草創期における児童福祉活動の実態

3-1. 幼児教育・保育の起源「アメリカン・ミッション・ホーム」の保育に見る歴史的意義

近代日本における幼児教育の起源は、1871年に米国婦人一致外国伝道協会から派遣された、メアリー・ブライン、ルイズ・ピアソン、ジュリア・クロスビーによる「アメリカン・ミッション・ホーム(亜米利加婦人教授所)」(現・横浜共立学園)の活動にあるといわれる。

この米国婦人一致外国伝道協会は、主に家庭的なホームの設立、生活困窮婦人労働者のための保育所や病院の設立などの事業を行っていた。そこから3人の女性宣教師が横浜に派遣され、欧亜混血児たちの養育と日本のキリスト教主義の女子教育を行うことを目的とした家庭組織の塾舎「アメリカン・ミッション・ホーム」を設立した。彼女たちは、幼い混血の子どもたちの実の母親のように愛情深く関わり教育した。開始時、母親を亡くし父親がイギリス連隊将校のイギリス人女兒2人、日本人の子ども2人、欧亜混血児の男女14人が入居した。

「アメリカン・ミッション・ホーム」は、孤児、混血児を含めた生活困窮者のための家庭的なホームとしての養育・保育、及び女子教育という養護的・教育的な働きによるものであったといえるが、結果的には、キリスト教幼児教育・保姆養成の発展と継続を促していくことになったのである。

3-2. 日本のプロテスタントの保育における先駆的児童福祉活動の実態

次に、明治期のプロテスタントのキリスト教保育において、先駆的に児童福祉活動を行った保育者、児童福祉実業家と活動内容について報告した(それぞれの活動内容は当日配布資料参照)。項目の順は、プロテスタントの児童福祉を目的とした保育施設創立(認可)年代順である。

①「善隣幼稚園(無料幼稚園)」1895年(ガゼル・タムソン夫人)

- ②「キングスレー館 幼稚園」1897年(片山潜)
- ③「二葉幼稚園(無料幼稚園)」1900年・「二葉保育園」1915年(野口幽香・森島峰)
- ④「神戸保育会」1904年(生江孝之)
- ⑤「相沢託児園」1905年(二宮ワカ)
- ⑥「愛染橋保育所」1909年(石井十次)
- ⑦「岡山博愛会 保育園」1910年(アリス・アダムス)
- ⑧「川上幼稚園」1912年(カナダ・メソジスト婦人伝道会)

これらプロテスタントの保育者や児童福祉の実業家は、アメリカやカナダの女性宣教師やアメリカ留学をした日本人キリスト者が多い。医者や幼児教育者を目指していたが、日本の生活困窮者やその子どもたちの姿を目にし、児童福祉へと使命感を感じて事業を始めた例がある。

また、プロテスタント保育の児童福祉活動への影響として、アメリカで1861年に始まった南北戦争を機として人道主義に基づく運動が様々な展開され、幼稚園運動へと発展したことが挙げられる。この幼稚園運動はフレール精神を尊重した博愛主義的発想を持つが、その幼稚園運動発展期には「子どもたちに最善の環境をあたえよ、子どもたちを望ましくない社会の影響から守れ」というモットーを持っていた。そのようなプロテスタントの保育者や児童福祉実業家たちの思想は、貧児のために保育料を無料にするということのみならず、保育内容・環境の充実化や、母親の就労支援や母親教育といった活動にも表れていた。

4. まとめ

明治期のキリスト教保育における福祉活動の実態より、以下の点が指摘できる。

第一に、プロテスタントとカトリックの教派の特性を基盤としている点である。プロテスタントのブライン、ピアソン、クロスビーの来日(1871年)、カトリックのマティルド来日(1872年)は、いずれも横浜で、しかも男性宣教師、男性司祭の促しによるものであり、両派共通する福祉的な活動の幹線経緯があった。

第二に、孤児やその母親などの救済活動、養護、教育活動が展開されていた点である。子どもに限らず、授産施設開設等による女性の生活支援が発端となり幼稚園や孤児院活動へと展開していった

前史が含まれており、こうした点が両教派に通じる先駆的役割であったといえる。

第三に、多くの施設が教派の支援・援助によって支えられていたという点である。なかでも修道女らはマティルドをはじめ他国での宣教活動の実績があり、彼女らの経験知が福祉施設や女子教育機関の設立等を促していったと考えられる。



皇室博物館の原田治郎 —美術に託した異文化相互理解—

大正大学大学院 小前ひろみ

原田治郎概略

現在では美術関係者にもあまり知られていない原田治郎(1878-1963)は、戦前に世界的権威であった*Encyclopædia Britannica* 14版(1929、以下、『ブリタニカ』)の数少ない日本人寄稿者で、日本美術の英語解説においては欧米で突出した知名度があった。本報告は原田のライフヒストリーを中心に、一プロテスタント信徒の異文化相互理解への貢献を論じたい。

原田の著作に関する日本庭園論や美術方面からの先行研究はあるが、原田の多岐にわたる仕事や人生は立体的に論じられておらず、信仰にも触れていない。

出生から渡米

原田は山口県周防大島の出身で、1893年に14歳で単独渡米した。長老派教役者 Ernest Adolphus Sturge (1856-1934、以下ストージ)が指導する柔港日本人基督教青年会(以下、青年会)で英語を学び入信する(受洗詳細不明)。排日運動が表面化し始めた頃である。

ストージは1856年オハイオ州で生まれ、人々を救済する人生を目指し、タイでの医療活動などを経て青年会を1886年に設立し、夫人と共に日本人教化を開始する。ストージは日本人留学生の支援と共に、教会の設置や対排日運動活動を牽引し、私財も生活も捧げ、最晩年まで尽力し続けた。ストージの活動は幾度も在米日本人を救い、渋沢栄一も感謝の意を表している。

ストージは日本人の伝統的な価値観とプロテスタントの価値観が共通すると考え、深い愛情を

もって日本人学生にキリスト教を伝え、帰国後に「日本人のキリスト教化・啓蒙」に寄与する事を期待した。学生達もストージを親のように慕い、恩に報いるべく努力した[吉田1995:325-326他]。ストージは日本文化、美術への造詣も深く、原田に強く影響を与えたと考えられる。

原田はハイスクール時代に鉄道事故に遭い、右脚と左手指3本を切断、臨死・蘇生を経験するが、難航した鉄道会社との賠償請求裁判をも乗り越え、カリフォルニア州立大学に入学する。原田の英語力には定評があり、在学中に現地採用されたセントルイス博覧会での活躍から、日本で教職が用意され、学位取得前の1905年に帰国となる。在米期間は足かけ12年であった。

帰国後の活躍

名古屋に着任した26歳の原田は、名古屋高等工業学校(以下、名高工)で英語科講師をしながら日本文化の自学を開始する。1908年の第八高等学校新設に伴い両校で教鞭を執り、翌年6月に名高工では教授となるが、8月に日英博覧会(以下、日英博)の事務囑託となり11月に渡英し、両校を休職する。

原田は報道官として日英博(開催1910年)の準備段階から活動した。その過程で英国美術界との交流が生まれ、美術雑誌『ステューディオ(*The Studio*)』誌の通信編集員として寄稿するようになる。同誌は図版を多く掲載し、欧米で多くの美術専門家・愛好家に講読された。原田のデビューは日英博の出品作を中心とした連載であった。初回の208号は、日本画の歴史や画壇の現状、鑑賞法などをわかりやすく解説している。原田は同誌へ戦後にかけて116本の寄稿をする。この英語雑誌での日本美術解説が、欧米で原田の名を知らしめてゆく。

1912年末に帰国した原田は両校に復職し、同誌へ寄稿を続ける。1914年には高等官5等、従六位となる。しかし同年、原田は巴奈馬太平洋万国博覧会の理事官に任官され、再び両校を休職し渡米する。排日運動が激化するサンフランシスコでは、開催直後の1915年2月22日に日本館で偽爆弾事件が起きる。原田は広報官として「取るに足らないジョークだ」とコメントし、全米に報じられた。言葉の機知によって、日米双方の一触即発の事態

を回避できたことは大きいと筆者は考える。農商務省の博覧会報告書にこの件は触れていないが、開会式での原田の演説が米国紙社説で評価されたと記されている。

1916年に原田は帰国すると、名古屋教会長老で東洋紡績取締役の服部俊一工学博士（1853-1928）の長女・初枝（1883-1968）と37歳で結婚する。俊一は山口教会を作った牧師・服部章蔵（1848-1916）の義弟で、章蔵と同じくデイビッド・タムソン（1835-1915）から受洗し、初枝も敬虔なキリスト者であった。初枝は横浜フェリス和英女学校、女子英学塾出身で、茶道や香道などにも精通しており、原田に影響を与えた。

同年、原田は勲六等瑞宝章を叙勲するが、休校命令を受けて両校を退職し、東京に居を移す。命令の理由は不明だが、第一次大戦中であり、政府が原田の英語力を必要とした可能性がある。東京では日本考古学会に入会し、『ステューディオ』誌寄稿が頻繁になる。後年の新聞インタビュー記事から、原田は美術による異文化相互理解を自分の使命と考えていたことが読み取れる。1918年には上野桜木町の帝室博物館至近に洋館を新築し、執筆活動に本腰を入れる。

帝室博物館嘱託

転居後の原田は国際労働総会に4度に渡り政府側随員として派遣されている。政府の黒子をしながら、美術の世界では複数誌に記名記事を書き、海外に日本美術の受容・理解を促した。その原田に、帝室博物館（以下、帝博）が1925年より「正倉院拝観期間中通訊」を、1927年からは「英文列品目録及解説編集並通訳」を嘱託した。かくして48歳で在野からアカデミズムに入った原田は「帝博の原田、Jiro Harada of the Imperial Household Museum, Tokyo」として、爾来晩年まで務めることとなる。

帝博での原田の初仕事は『御物上代染織文』と『正倉院御物図録』の英語解説であった。邦文解説の翻訳ではなく、原田は独自裁量を得ており、欧米人に理解しやすい解説をした。ステューディオ社から原田の初の単著 *The Gardens of Japan* (1928) が刊行されたのと相俟って、原田の明解な英語解説は評判を呼び、研究者から引用されてゆく。

1929年に発売された『ブリタニカ14版』（英語版）

に、50歳の原田は13項目の寄稿をした。巻頭言に「創刊以来、各時代各分野の第一人者の寄稿を掲載するという方針」とあり、原田は世界的権威に認められたということである。

帝博は原田の単著、正倉院宝物の英語解説本 (1932) と、所蔵品の英語図録 *Examples of Japanese Art in the Imperial Household Museum* (1934) を刊行した。原田は同書でストージの詩を、欧米人による日本理解の好例として引用した。加賀千代女の朝顔の句を用い、日本人の優しさを詠んだ詩である。出版と同月にストージは昇天した。原田の解説にみられるフェアな視点はストージから学んだものであり、ストージの願いを実現すべく努力してきたともいえる。1931年から容態が悪くなっていたストージに対し、この引用には原田の万感の思いが籠められていたであろう。

国際貢献

日本の対外文化工作として結成された国際文化振興会（以下、KBS）は、1935年に56歳の原田をオレゴン州立大学交換教授として派遣した。原田の講義は好評で、全米各地から依頼が殺到し、ラジオ出演もした。同大学教授会は原田に名誉文学博士の学位を授与し、講演は1937年に *A Glimpse of Japanese Ideals* としてKBSから出版され、三版までに至った。

戦後を迎え、原田は正倉院評議会会員を宮内府から委嘱され、帝室から国立に移行する博物館の渉外事務連絡員としてGHQとの折衝をおこない、1951年にガレリア資金による人事交流で渡米する。帰国後、原田宛に講和記念サンフランシスコ日本古美術展の企画が持ち込まれ、1ヶ月で開催に持ち込む。原田は74歳になっていたが、渡米して各地で講演をおこなった。同展は現在まで続く海外巡回古美術展に繋がってゆく。

1933年から休筆していた『ステューディオ』誌への寄稿を1955年に再開するが翌年で終え、同年に77歳で *Japanese Gardens* (1956) を出版したのが絶筆となる。1963年7月25日に84歳で逝去し、天皇から弔慰金が贈られ、勲五等瑞宝章が授けられた。

まとめ

原田はストージのもとで学び、終生、ストージ

の教えにもとづく異文化相互理解に尽力し、業績は世界的に評価された。原田は日本語での著作はなく、裏方仕事を多くこなしたため、現在では殆ど無名となってしまった。しかし原田の常にフェアで誠実な著作は現在でも古びていない。本研究が原田の再評価に繋がる事を願ってやまない。

原田の信仰について『現代日本紳士録』（1932）に「敬虔なクリスチャン」と記されているが、現在把握している限りでは教会活動には参加していない。原田の受洗記録や教会籍については今後の課題として調査を続ける次第である。

要旨を執筆するにあたり、発表後に判明した事実を若干加味させて頂いた。言及していない原田の著作とその他の参考文献については拙論(2022)「原田治郎研究——日本美術における一異文化交流史」『大正大学大学院研究論集 ONLINE ISSN 2189-0498 46号』をご参照頂きたい。

謝辞

発表の場を頂き、貴重なアドバイスを賜ったことに、この場を借りて心より感謝の意を表します。

参考文献

吉田亮（1995）『アメリカ日本人移民とキリスト教社会：カリフォルニア日本人移民の排斥・同化とE・A・ストージ』日本図書センター

明治期最初の教会オルガンはどんなものであったのかを考察する

赤井 励

明治5年（1875）頃、居留地に待機していた各宗派の宣教師たち（ブラウン、リギンス、シモンズ、ウィリアムス、フルベッキ、ヘボン）は、高札撤去前から日本語の勉強、医療、聖書翻訳をしながら宣教活動を開始していた。楽器を具体的に確認できる資料がないが、ヘボンは音楽の愛好家である上、居留地39番のチャペルにオルガンを備えており、明治6年には日本人医学生が日本語と英語で讃美歌を歌っていた。もちろん日本語讃美歌はまだ試作段階のもので譯者がその歌詞を伝えている。ヘボン塾で数年学んだ西村庄太郎はミス・ベラ・マーシュにオルガンを習った人で、後に三共株式会社を創立した。横浜共立学園のL・H・ピアノンは山手居留地212番の小礼拝堂で祈祷会

のオルガニスト、旅行・伝道の際には携帯オルガンも使用していた。ルーミス師も讃美歌・オルガンをよく教えたようである。明治7年（1874）に横浜の湊町の教会で長老であった南小柿州吾（のちに横浜指路教会牧師）は、地元の役所から「君らが使用している楽器は日本で初めてのものであるから、一応、使用届を出すように」言われたという。横浜指路教会の遠い過去につながる愉快な逸話であろう。

大阪では明治6年（1873）に日本語礼拝で詩篇95「千歳の岩」をチャントで歌った（米国聖公会のA.R.モリス報告、3月14日）。明治8年（1875）京都照暗女学校のミス・エディもオルガンで讃美歌を教えていた。

当時のオルガンは船に積んで陸揚げしてすぐに使用できるリードオルガン、ハルモニウムであった。しかし、最初は立派な教会堂があるわけではなく、その使用には困難が付きまとはずである。まず借りることができた教会堂は普通の日本建築。畳が主たる床材に敷いてある。木材でできた床も、古いものは虫損、湿気による劣化、動物による穴あけなどが珍しくなかった。明治期の古オルガンは虫食いがひどく、日光に晒されて板の割れ、反りが出ているケースも少なくない。民家での伝道では、ベビーオルガンや折り畳み式でない場合、重さから畳が凹んだり床が落ちてしまう事故があったはず。長崎県の外海町のカトリック教会では、ド・ロ神父が持ち込んだ最初のフランス製ハルモニウムが残っていた。修復を担当した仁平利三氏（ホーリネス横浜六角橋教会員）によれば、虫損がひどく、空気漏れを避けるための穴ふさぎや錆びついた木ネジを抜くのに苦勞されたとのこと。

明治21年より以前は国産のリードオルガンが量産されておらず、楽器販売商社（主に書店）のカタログにもメーソン&ハムリン社、エスティ社、カーバンター社等、海外製のみが掲載されている。

新島襄の故郷、群馬県の安中教会では明治期のメーソン&ハムリン社製、意外に重い61鍵のリードオルガンが残っていた。製造番号が2種類あり、年代特定が難しいが1880年代と思われる。オルガン導入した湯浅治郎は明治17年頃、県議会議員で地域の有力者であった。標高の高い安中までの道のりを思うと輸送費も高額になったと思われる。

横浜海岸教会はパイプオルガンを備えた旧ユニオンチャーチの教会堂を関東大震災で失ったが、次の日本人教会の礼拝堂にエオリアン・グランドという高級な吹き出し式リードオルガンを備えた。同教会は次にハモンドオルガンを導入した為に、エオリアンは後に池袋西教会に移設され、オーウェン・ガントレット教授の尽力で武蔵野音楽大学楽器博物館に再移設されて残っている。このエオリアン社のリードオルガン・カタログが1984年に復刻されている。エオリアン社のリードオルガンは、明治24年(1891)にエドワード・ガントレットが東京の本郷中央会堂に設置したVocalionオルガンと同系列の構造を持った楽器だった。このカタログには、当時の国際的著名人がエオリアン製オルガンのパトロンだったことが記述してある。曰く、セオドア・ルーズベルト大統領、英国アレクサンドラ王妃、ロシアのニコライ2世、スペイン王アルフォンソ8世、J.P.モルガン、アンドリュー・カーネギー、コルネリウス・ヴァンダービルト、パデレフスキー、トーマス・エディソンなどなど。

歴史的に古い小型のリードオルガンは残っていないのか？という疑問を感じる方も多いかと思う。確かに初期の開拓伝道、路傍伝道などで39鍵や49鍵の、小型の折り畳み型のリードオルガンが使用された歴史事実はあると思う。戦前のヤマハ(日本楽器製造株)の主任オルガン技師であった川上謙治氏(取材時90歳)のお話によれば、若い頃にメソジスト派のコーツ牧師が静岡で開拓伝道しており、持ち運び可能な小型リードオルガンで讃美歌伴奏するのに感銘を受けて入信したとのこと。

私事で申し訳ないが、拙宅にBilhorn Bros.製の折り畳み式オルガンがある。これは個人輸入したもののだが、讃美歌作曲家でもあったPeter Bilhornが開発したオルガンで、軽量なうえ、音量もあるので、軍隊でも使用された種類である。例えば米軍は第二次世界大戦中に落下傘部隊も携帯オルガンを装備しており、兵士と共に地上に降下していた。従軍牧師は直ちに戦死者の葬儀や礼拝に従事できたわけである。ヴァーモント州のEstey社も米軍と大口の契約(累計1万台以上、Gellermanの研究)を結んでいた。沖縄の博物館にもこの形態のオルガンがあると聞いている。讃美歌研究家

の故大塚野百合先生が御著書中で拙宅のBilhorn製オルガンにも言及しておられる。

徳富蘆花が明治34年の『思出の記』中で関西学院のサマーキャンプ(比叡山)にリードオルガンを持って行って歌ったことを書いている。徳富蘆花の住んだ家を保存している東京都の蘆花公園には、愛子夫人が使用した明治34年頃の西川オルガンが残っているのを私が発見し、新聞報道されたこともあった。

昭和中期までは救世軍なども小型を使い続けたはずである。しかし実物が教会に残っていない。その理由は多々あると思う。まず教会員や牧師、神父がその歴史的重要性に気付いてこなかった。さらに戦争、震災、断捨離などでその多くは失われたであろう。また弾き手がない、修理する人がみつからない、電子オルガン、パイプオルガンが導入できたので、リードオルガンは不要、幼稚園で使用してきたが、弾ける保母さんもない、等々という話が多いのが実態と感ずる。

一昨年(2022)秋に、教団の松山教会にてキリスト教礼拝音楽学会の大会が開催されたが、日本リードオルガン協会会長の中村証二氏が尽力して、展示、演奏された小型の三木オルガン、メーソン&ハムリン製オルガンは、実際に四国の開拓伝道に使用されたものであった。都会の大教会よりは地方の、地域の伝統を大切にす教会に、案外歴史的なオルガンが残っているのではないだろうか。群馬県、安中教会のオルガン群も、そういった例の一つと言えるであろう。

主要参考文献；

- 『井深梶之助とその時代』第一巻 1969年
- 井上平三郎編『日本基督教会横浜海岸教会史年表<I>』1982年
- “The Aeolian Orchestrelle”, AMR Publishing Co. 1984
- Robert F. Gellerman “Reed Organ Atras” 1985
- 岡部一興編・有地美子訳『宣教師ルーミスと明治日本』2000年
- 大塚野百合著『讃美歌唱歌・ものがたり』2002年
- 原 豊『へボン塾につらなる人々』2003年
- 横浜歴史博物館編『風琴元祖 横浜洋琴風琴ものがたり』2004年
- 日本聖公会京都教区・加納重朗訳『宣教事始め』

2007年
横浜プロテスタント史研究会編『横浜開港と宣教師たち』2008年
拙著『日本の洋楽はオルガンから始まった』2023年

関東大震災における内村鑑三

中央学院大学教授 黒川 知文

はじめに

1923年9月1日11時58分32秒、大地震が南関東に発生した。地震による死者と行方不明者は推定10万人を越えた。

日本の基督教徒を代表する内村鑑三は関東大震災にどのように応答したのであろうか。

両者の大震災における内村の言動については近年において先行研究がいくつかある。⁽¹⁾ 本稿では、主に内村の日記、書簡等を史料にして考察する。

1 震災直後の内村鑑三

内村は中田重治と1918年1月から再臨運動を開始した。運動は関東と京阪神の主要都市を中心に岡山、軽井沢、北海道に及び、都市の知識階級や学生の間に広がった。だが1919年6月から内村は再臨運動から撤退して、大手町衛生会館講堂に



写真1 晩年の内村

において「モーセの十戒」講演を開始した。⁽²⁾ その後は『聖書之研究』発行と聖書講演を活動の中心にした。1921年以降は「ローマ書講演」に力を注いだ。1922年10月からは「キリスト伝の研究」講演を開始し、1923年7月には有島武郎の心中事件を批判して『万朝報』に「背教者としての有島武郎氏」を寄稿した。

軽井沢における休暇

内村は、1923年7月20日から書生数名を連れて

軽井沢に一軒を借りて休養しつつ、執筆活動、宣教師との交流、軽井沢集会堂での講演を行った。⁽³⁾

軽井沢での夏は内村にとってどのようなものであったのか。8月9日の田中竜夫宛ての書簡で「今年の夏も亦好き休みには成りませんでした、内外人との交際の為に大分に勢力を奪はれました、宣教師は見れば見る程イヤになります」と、人との交流と宣教師への不満を述べ、「9月1日より沓掛星の湯へ移ります」と結んでいる。⁽⁴⁾ 同日青木義雄に宛てた書簡でも「来る一日より本当の休みを得るために沓掛の星の湯へ行きます」と述べており、9月1日は沓掛の星の湯へ行き休養する予定であったことが分かる。⁽⁵⁾

9月1日に関東大震災の報を内村は隣家の小野塚喜平次から聞いた。居合せた石原兵永は以下のように記している。

先生は庭先の草の上に椅子を出し、暗闇の中で、いつまでも祈っておられた。お互いは床に就いてもなかなか眠れず、先生は床の中から時々声をかけて、私たちをはげましてくださった」…（翌日の夜明けに）先生は言われた。「大丈夫。神に頼っているのが、ただ一途である。多くのクリスチャンが、このような場合に救われた例がある。天然ばかり見ると気を落とす。しかし神の意志が働いている。いかなる事があっても、クリスチャンには最悪は来ない」。⁽⁶⁾

内村は長時間祈り、神を信じる者に最弊は来ないとの内的確信を得て、弟子たちを励ましていることが分かる。

内村は日記に以下のように記している。

9月1日（土）雨 正午少し前に強震を感じた。浅間山噴火の前兆に非ずやと思うて驚いた…東南の空遙に火焰の揚るを見た。東京に在る妻子家族の身の上を思ひ、心配に堪へなかった、夜中幾回となく祈つた。そして祈つた後に大なる平安を感じ、黎明まで安眠した。⁽⁷⁾

内村は、まず家族の安否を心配し、神に祈って平安を得ていることが分かる。

東京への帰宅

翌9月2日、内村は石原と羽仁元吉とともに午前10時10分軽井沢発の汽車で東京に向った。途中、汽車は荒川鉄橋に近い川口町駅で動かず、下車し、内村は「病める足を引きづりながら」柏木の自宅に22時に帰った。12時間かけての帰宅であった。家族に負傷者はなく、家屋の被害も軽微であったが、余震があるためにその夜は家族と共に露營した。食糧は三日分しかなかったが近所同士で分け合っている。

9月4日に4年間聖書講演をした大手町衛生会講堂が消失したのを知り、内村は「嗚呼我が懐かしき衛生会講堂よ」と悲しんだ。⁽⁸⁾

内村は、9月5日の日記に「是は恩恵の裁判である。東京は今より、宗教道德の中心として全国を支配するであろう」と記し、自宅玄関に以下の張り紙をした。

今は悲惨を語るべき時ではありません。希望を語るべき時であります。夜はすでに過ぎて光が臨んだのであります、皆様、光に向つてお進みなさい。殺さん為の打撃ではありません、救はん為の名医の施した手術であります。感謝して之を受けて、健康にお進みなさい。⁽⁹⁾

「恩恵の裁判」「希望を語るべき時」「光が臨んだ」「救はん為の名医の施した手術」と、内村は震災は神による救いのためであると、積極的な面を論じたことがわかる。

9月6日からは今井館聖書講堂を警衛のために上京した仙台第二師団の小隊に22日まで内村は提供した。余震の続く中、しばらく家で過ごした。

日曜日の礼拝

9月9日は日曜日であり、震災後初めて内村宅で聖会（礼拝）を行った。来会者は少なく20人ほどであった。近所に配慮して讚美歌頌栄を廃してマタイ福音書24章の終末預言の箇所を朗読して第二ペテロ書3章10-13節から「末日の模型」と題して講じた。

9月12日に内村は松屋呉服店の自動車に乗り、震災後にはじめて東京市内の被害状況を巡視した。「其惨状言語に絶せりである」と内村は驚き、

以下のように記している。

花の都は荒野に化したのである。之を見て我心は狂はん計りである。今に至て役にたつ者は青年時代より養ひ来りし信仰である…東京は滅びても、日本国は滅びても、然り、滅びない者が唯一つある。それはキリストの十字架である…我等信者は覆滅の惨状を見て人と共に嘆くことなく、主の十字架を仰瞻て永久不滅の希望を起すべきである。⁽¹⁰⁾

震災による惨状を初めて見て、内村は「狂はん計り」の心境にあった。9月13日に小野塚喜平次に宛てた書簡にも「昨日初めて日本橋附近の焼跡に行き実地を目撃して実に驚きました。東京は元の野原に還ったのであります」⁽¹¹⁾と述べている。また10月8日に太田十三男に宛てた書簡にも「犠牲の余りに莫大なる故に口を緘して語り価値ありません」⁽¹²⁾とも述べている。かなりの衝撃を受けたことが分かる。9月20日に米国のベルに宛てた書簡では、震災の状況を述べた後に「ヘブル書12章25-29節、第二ペテロ3章10-13節が震災の印象と希望だとしている」⁽¹³⁾

衝撃からすぐに信仰に立ち返って、キリストの十字架に「永久不滅の希望」を見出したことが分かる。

9月16日、日曜日の朝の集会には50人余りの来会者があった。詩篇46篇「神は我らの避けどころ」とマタイ福音書28章18節「わたし（イエス）には天においても地においても、すべての権威が与えられています」を讚美歌の代わりに朗読し、「彼（イエス）の許可なくして何事も起こらない…（今回の震災は）日本の国民の為に、世界全人類の為に、最大の善を行ふ為に起つた事である。我等は何故にさうである乎、其理由は判明らない」と講じた。⁽¹⁴⁾

9月19日には「来る人毎に悲惨の経験と実話とを語る。之を聞いて自分も消入る計りに感ずる。希望を語つて相互を力附けんとする者は一人もない」⁽¹⁵⁾と述べ、事態の厳しさを内村は把握して、しばらく意気消沈していることが分かる。

9月20日は「祈祷と学習にて」過ごした内村は、21日には、以下のように他者に同情するが救援できない状況を述べている。

罹災者の事を思へば耐へられぬ苦痛である。乍然自分の如きは平素斯かる場合に処するの途を唱へ来つた者であるが故に此際急に慰安救護に従事するの途を知らない。唯僅かばかりの自分相応の奉仕を為すまでである。(16)

内村は、罹災者に同情するが、救援活動をした経験もなく救援方法も知らない自分の立場を正直に述べている。

9月23日、日曜日の聖書研究会は、午前と午後に分けて今井館聖書講堂で開かれた。

午前に80人、午後には15人の来会者があった。来会者は増えたが会員の4人が震災で死亡し、内村は多くの哀しい話を聞かされる。内村はヘブライ書12章8節「もしあなたがたが、すべての子が受けている訓練を受けていないとしたら、私生児であって、本当の子ではありません」から、震災は神からの試練であると、「一同の元気を引立んとして勤めた」。(17)

精神的復興

9月25日には、東京市民が都市復興だけに従事して、「此天譴に遭ふて自己に省みるの気風に乏しきは悲しむべき事である」と記している。「天譴」を使用していることに注意したい。またこの日には、本所から避難してきた罹災者がいて、その惨状を物語っている。また内村は「我等の信仰の友にして絶望に沈んだ者の、未だ一人もあるを聞かない」(18)と述べ、会員の動向に内村の関心がある事が分かる。

9月27日には、東京市の復興が商売や物質的復興に集中していることに対して、「精神的復興を語る者は一人もない」と内村は批判している。9月28日の日記には「罹災者に対し同情に堪へない」と記し、雑誌の編集と原稿書きのために全日過ごしている。9月29日に軽井沢を引き上げること依頼している。

内村は、休養するべき夏の休暇が予期せぬ地震により台無しになったことを「多事多難なる夏であった、休養どころではない、言尽くされぬ心の悩みであった。『主よ赦し給へ』である」と結んでいる。(19)

9月30日日曜日の朝の集会には百人以上、午後

の集会には十数人の来会者があった。かなりの増加がみられる。創世記18-19章から「ソドムとゴモラの覆滅」と題して、震災の意義について講じている。(20)

自警団に参加

震災後二日目の9月3日には、「放火の虞ありとて各家警衛の任に当つた」(21)とあり、自警団がすでに自発的に形成されたと考えられる。

10月5日には、自警団に関する以下の記述がある。

10月5日(金)晴 昨夜順番に当り、自警団の夜番を務めた。内村医学士(長男の祐之)金剛杖をつき提燈を持つて前に進み、老先生(内村)拍子木を鳴らしながら其後に従ふ。昼間は到底演じ難き業である。震災が産出し滑稽の一である。(22)

3月に東京帝国大学卒業した長男の後に拍子木を鳴らしながら内村は歩いた。

10月18日の日記にも「災後五十日を経る今日、放火窃盗の危険は依然として存し、我等は交代に夜毎に警戒せねばならぬのである」(23)、10月27日にも「昨夜も亦夜警であった。若き医学士を助けて、少しなりと彼の任務をして軽からしめんと務めた」(24)とある。

したがって、震災後2か月間、町内会が主催する自警団による夜警に、内村は9月3日以降、家族で数度、従事している。これはあくまでも町内の安全確保のためであり、勿論特定民族を殺害してはいない。自治会の業務であった。

2 内村鑑三の震災論

震災後、渋沢栄一は、『主婦の友』10月号で以下のように天譴論を展開した。

今回のしんさいは、未曾有の天さいたと同時に天譴である。維新以来、東京は政治経済其他全国の中心となつて、我国は発達して来たが、近来政治界は犬猫の争闘場と化し、経済界亦商道地に委し、風教の退廃は有島事件の如きを賛美するに至つたから此天さいは決して偶然ではない。(25)

洪沢は、政治界経済界と風教の退廃に対する天の処罰であるとする天譴論を述べた。

他方、内村の震災論は、自ら発行する『聖書之研究』ではなくて、対外的な雑誌である『主婦之友』に10月1日に寄稿した「天災と天罰及び天恵」に述べられている。内村の震災論は以下の3点にまとめることができる。

第一に、天災は自然現象である。東京市民がすべて聖人であったとしても「地震は起こるべき時には起こつたに相違ありません」⁽²⁶⁾

第二に、天災は、人によっては恩恵にも刑罰にもなる。「斯かる市民（風教墮落した市民）に斯かる天災が臨んで、それが天譴又は天罰として感ぜらるるは当然であります」と論じ、内村は洪沢の天譴論を一部認めていることが分かる。⁽²⁷⁾

第三に、天災の犠牲者の死は他者のための贖罪の死である。「彼等は国民全体の罪を贖はん為に死んだのであります…払ひし代償は莫大でありました。然し挽回した者は国民の良心であります…新日本の建設は茲に始まらんとして居ます」⁽²⁸⁾

内村は、今後すべきことは、「無数の学校の復活」「孤児院の建設」であると述べ、「敬虔に満ちたる、勤勉質素の東京市を見んと欲します」⁽²⁹⁾と希望を表明している。

このように、内村も当初は「天譴」を使用するが、日本人が罪を悔い改めず神を信じていないことへの神の「天罰」であり、震災の犠牲者は生き残った者が再出発するための神の愛による贖罪死であったと、震災の信仰的な意味づけをしている。

9月9日に書き上げて10月10日の『聖書之研究』に掲載された「末日の模型 新日本建設の絶好の機会」では、以下の3点が論じられている。

第一に、罪なき者が犠牲になった意味はわからないが、「最も甚だしく痛み給ふ者は天に在ます神御自身であると信ずる」。

第二に、「罪人に臨む滅亡は適當の刑罰であつて、無事に臨む死は一種の贖罪の死である」、第三に、この度の震災は、終末に全世界に起きる災害の「模型」である。

そして、「終末ではない、新天新地の開始である」として、震災により、「同胞間の同情の泉が開かれた」、日米関係が良好になった、敵国であった中国が米穀を日本に援助した、事を挙げ、最後に「茲に新日本国建設の絶好の機会を与へられたの

である」⁽³⁰⁾と結んでいる。

註

- (1) 内村の大震災への応答については以下の著書が部分的に扱っている、政池仁『内村鑑三伝』教文館 1977年；小原信『内村鑑三の生涯』PHP研究所 1992年；鈴木範久『内村鑑三の人と思想』岩波書店 2012年；関根清三『内村鑑三 その聖書読解と危機の時代』筑摩選書 2019年；関口安義『内村鑑三 闘いの軌跡』新教出版社 2023年等。論文としては以下がある。半澤健市「関東大震災とリスボン大地震—天譴論・内村鑑三・ヴォルテール—」『日韓相互認識』第5号（2012年）。
- (2) 内村の再臨運動に関しては拙著『内村鑑三と再臨運動』新教出版社 2012年、を参照。
- (3) 内村が軽井沢で会った宣教師や人物には、宣教師G.チャプマン（7月29日）、尾崎行雄（8月4日）、宣教師H.リデル（8月11日）、W.M.ヴォーリズ（8月12日）、宣教師コルテス夫妻（8月13日）、ランカスター神学校校長リチャーズと田村直臣と木村清松（8月16日）、杉浦貞次郎と羽仁もと子（8月25日）宣教師ピアソン（8月27日）がいた。妻のしづは8月27日から29日に滞在した。また、内村は礼拝説教としては7月22日に「信仰と地から」8月5日に「宗教と実際生活」、8月19日に「美と義」、8月6日に「誘惑に勝つ途」と題して軽井沢集會場で講じている。鈴木範久『内村鑑三日録11』教文館 1997年、274-279頁。
- (4) 内村が宣教師を嫌ったのは、日本に来た宣教師の多くが日本語を知らないことにあった。「我国に千人近くの宣教師が滞在して居て…日本語を知らないとは実に情けない次第である。斯んな宣教師が何万人来ようが、日本国は彼等に依て教化されない。畢竟するに宣教師の伝道は一種の道楽と見るより外に見方がない」『内村鑑三全集』39 書簡4、岩波書店、1983年、218頁。
- (5) 『内村鑑三全集』39 書簡4、岩波書店、1983年、105頁。
- (6) 石原兵永『身近に接した内村鑑三』中、山

本書店、1972年、318-319頁。

- (7) 『内村鑑三全集』34 日記2、岩波書店、1983年、218頁。
- (8) 同、219頁。
- (9) 同。
- (10) 同、222頁。
- (11) 『内村鑑三全集』39 書簡4、岩波書店1983年、106頁。
- (12) 同、109頁。
- (13) 同、107頁。
- (14) 『内村鑑三全集』34 日記2、223頁。
- (15) 同、224頁。
- (16) 同。
- (17) 同、225頁。
- (18) 同、226頁。
- (19) 同、227頁。
- (20) 同、228頁。
- (21) 同、218頁。
- (22) 同、230頁。
- (23) 同、234頁。
- (24) 同、238頁。
- (25) 「禍を転ぜよ 渋沢氏語る」『万朝報』1923年9月13日号
- (26) 『内村鑑三全集』28、18頁。
- (27) 同、19頁。半澤健市も、関東大震災は自然現象であると同時に遇う人によって「天恵」にも「刑罰」にもなるとして「渋沢栄一」の天譴論を「実に然り」であるとみる、と述べ、さらに日本の天職は宗教国家として生きることが「原理主義者」内村の結論だと結論している。半澤健市「関東大震災とリスボン大地震—天譴論・内村鑑三・ヴォルテール—」『日韓相互認識』第5号（2012年）、111-113頁。
- (28) 同。
- (29) 同、20頁。
- (30) 同、31頁。

井元儀明さんを偲ぶ

岡部 一興

井元さんは、1960年のクリスマスに日本基督教団田園調布教会の岡田五作牧師より洗礼を受けま



2023年12月6日
逝去、享年84

した。その時に頂いた聖句は、「神の武具を身に付けなさい」（エペソ人への手紙第6章13節）でした。一時は武具を脱ぎ捨てた時もありましたが、再びイエスさまに救われていることを確信し教会に戻り、横浜指路教会の裏の入口のベルを押しそうです。藤掛牧師

と面会して2008年10月に奥様と転入会しました。

明治学院大学時代は男性合唱団であるグレゴリーバンドで活躍しました。途切れていたグレバンを7人の友人と復活させました。その仲間には、横プロ研の会員だった島田貫司さんがいました。讃美歌の練習に明け暮れ、合宿をして讃美歌を歌う奉仕をしました。大学卒業後は、仕事に邁進、全国を飛び廻り、仕事中心の生活が続きました。

横浜指路教会では、2013年に長老に選ばれ、会堂保全委員会の委員長となり、その時私も委員としてご一緒しました。2011年東日本大震災があり、天井から吊るされていたシャンデリアについて議論が集中し、結局、50キロ以上もあるシャンデリアを取払うことになりました。また建物耐震結果に基づき、構造耐力上、天井内部の鉄骨と2階床の補強を井元さんが委員長の時実施しました。

私的な関係では、小生が関係する横浜プロテスタント史研究会の会員になって頂きました。熱心に例会に出席し、裏方の奉仕をして下さいました。井元さんが、お湯を沸かし紅茶を作り、それを配って下さったのを覚えています。苦しくても弱音を吐かなかった井元さん、今は神のもとに召されました。ご家族の上に主の慰めと恵みが豊かにありますようにお祈りします。（この記事は、横浜指路教会が発行する『指路』第367号（2024年4月28日）に記載された記事から転載しました。

（岡部一興）

【編集後記】 保育史について3人の共同発表は珍しい形であった。原田次郎に関しては教会との関係、信仰歴を知りたい。リードオルガンは教会以外に、小学校の音楽教育とも関係あったであろう。黒川氏の発表は内村と賀川であったが本紙では賀川について省略されたのは残念。井元儀明氏の誠実謙遜な姿が印象に残る。（花島光男）